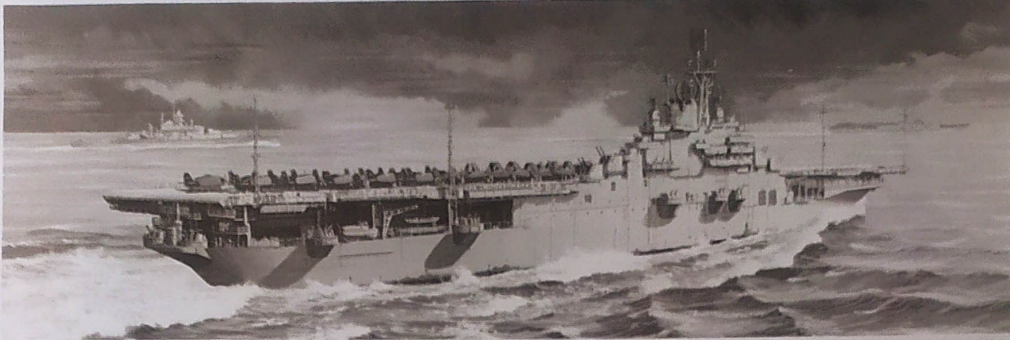


HANCOCK

ウォーターラインシリーズ NO.113
アメリカ海軍 航空母艦ハンコック
U.S. AIRCRAFT CARRIER



イラストレーション・上田豊太郎

WATER LINE SERIES

〈アメリカ海軍航空母艦ハンコック CV-19〉

ハンコックは太平洋戦争中の米海軍主力空母たるエッセックス級 Essex (CV-9) 級の第11番艦にあたる。エッセックス級は当時において極めて満足すべき性能を有し、世界でも第1級の空母であったが、戦闘が激しさを増すにつれて、対空火力の増強に迫られていった。その手段のひとつとして、当時米海軍の主力対空兵器であったホフース40ミリ機銃の増設があげられる。

エッセックス級は同時期の英・日の正規空母イラストリアス Illustrious 級や大鳳とは異なっており、艦首はエングローズド・バウ(またはハリケーン・バウ)になっておらず、艦首前部、飛行甲板下に40ミリ機銃座を設けていた。この機銃(4連装)はエッセックス級で初期に起工された艦は1基であったが、これを1943年以降に起工した艦では2基に増設されている。このため、機銃座装備面積を確保する必要上、艦首が約3メートル延長されている。したがって、これら艦首機銃座を2基設けた艦は、艦体が多分だけ長いわけに、ために長船体型 long hull と呼ばれている。これに対して、オリジナルな機銃座1基のものは短船体型 short hull と呼ばれる。

ハンコックはこの長船体型エッセックス級の2番手(1番手は1943年1月15日に、ノーフォーク海軍工廠で起工されたシャングリラ Shangan-La CV-38)として1943年1月26日クインシーのベスヘルム製鉄所で起工されたが、竣工は1944年4月15日と長船体型中もっとも早く、実質上長船体型の第1番艦となったのである。なお、長船体型で本艦よりハルナンバーが若いものには、タイコンデロガ号 Ticonderoga (CV-14) と、ランドルフ号 Randolph (CV-15) があるが、竣工は遅い。ハンコックは1940年度計画で発注されたエッセックス級11隻中の最終艦で、当初の艦名はタイコン

デロガ号が予定されていたが、建造中にニューポート・ニュース社で建造中の同型艦ハンコックと艦名が交換されたものである。こういうことは戦時中の米海軍新造艦にはよくあることで、とくに戦没艦の名をただちに建造中の艦に引きつづける(例えばエッセックス級の2番艦ヨークタウン Yorktown (CV-10) は、当初ボーンム・リチャード Bon Homme Richard の名が予定されていたが、ミッドウェー海戦で先代のヨークタウン(CV-5) が日本海軍に撃沈されるや、直ちにこの名を引きつづけた。) ために、撃沈したはずの艦が再び登場して日本海軍を少なからず混乱させるものとなった。

竣工したエッセックス級24隻中の長船体型は14隻である。機銃増設にとともに、短船体型では銃座左側に1基だった Mk63 FCS (射撃指揮装置) は、長船体型になって飛行甲板前部左右両側に1基ずつ設けられている。後期に竣工した艦ほど対空兵器が強化されており、エッセックスの竣工時は5インチ38口径砲両脇12門、40ミリ機銃40門、20ミリ機銃38門であったものが、太平洋戦争終結まじわりになると40ミリ機銃だけでも4連装17基68門と大巾に増強されている。これに加え強力なレーダー、射撃指揮装置、CIC (戦闘情報指令所)、VT ヒューズ (近接信管) 等は日本の水準を格段に引き離したもので、このためにおよびだけの神風特別攻撃を受けても日本艦を容易に近づけず、1隻の戦没艦も出さなかった。もちろん以上の対空火力の他に本艦固有の防御力も強力なもので、艦体各部に強力なダメージ・コントロール・システムは絶大な威力を発揮し、フランクリン Franklin (CV-13) やバンカー・ヒル Bunker Hill (CV-17) のように、一時は総員退去の命令が出るほど絶望的に被害を受けたにもかかわらず、格納庫甲板以下のバイタル・パートにはほとんど無傷で、母港に修理にもどるといっような姿を見せている。

本艦も1944年10月14日台湾沖航空戦で、日本機よりの水平爆撃を、同年11月25日はフィリピンで特攻機の突入を、翌年1月21日台湾で搭載機の着

艦事故を(格納庫甲板以上が炎に包まれるという大事故であった)、45年4月7日は沖縄で特攻機の突入を受けるという4回の被害を経験している。ことに最後の特攻機によるものは、特攻機の投下した(突入前に投下)爆弾が飛行甲板前部に爆発、続いて同じ部分に特攻機が突入するというものもあったが、格納庫甲板にまで火災が広がったものもかわらず、間もなく沈火に成功。さらに応急処置の結果ふたたび戦列に復帰するという不死鳥のような働きを見せた。

大戦が終了して約9ヶ月後の1946年4月、ハンコックは西海岸ワシントン州ブレマートン海軍基地で現役を離れてモスボール状態に入った。1951年12月、本艦は近代化改造の上現役復帰が行われることになり、CVA-19 (攻撃航空母艦) の新種別の下にジェット機運用のための新式スチームカタパルトC-11を含むSCB-27改造が行われた。本艦はこれで、米空母中最初にスチーム・カタパルトを装備した艦となった。続いて1956年にはエングローズド・バウ、ファングロッド・デッキ化工事が行われ、エッセックス級中最新のジェット機運用装備をもつ空母の一隻となったのである。以後何度か近代化の改造が行われ、1965年からはベトナム戦争に参加した。この頃はすでに新式のフォレストール Forrestal 級超大型空母群のような強力な攻撃能力は持たなくなっていたが、小回りのよく軽艦上攻撃機ダグラ A 4 スカイホーク・シリーズを主力にベトナム戦の重要な一翼を担った。

ハンコックは幾度もの改造により現在の本艦は原型を全くとどめていないが、エッセックス級の中で、1950年9月に竣工したオリスカニー Oriskany (CV-34) と共に、最後の現役空母としての名譽を得た艦である。本艦の愛称ファインディング・ハンパ Fighting Hannah の名は米海軍史に長く残るものとなる。

〈空母ハンコック主要データ〉
基準排水量: 27,100トン 満載排水量: 33,000トン
全長: 270.66メートル 最大巾: 28.35メートル
吃水: 7.01メートル 飛行甲板全長: 268.0メートル
速度: 33.0ノット 軸馬力: 150,000馬力
飛行機搭載数: 80機以上 カタパルト: 2基

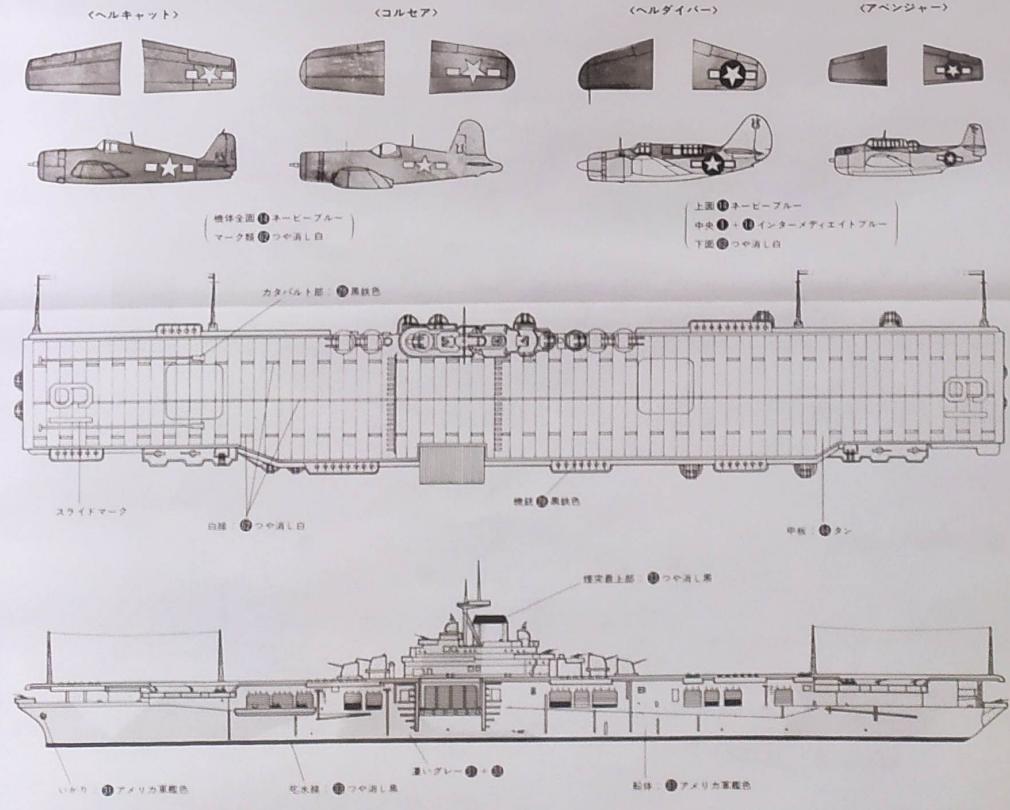
PAINTING

〈空母ハンコックの塗装について〉

一般にアメリカの艦艇は、旧日本海軍の艦艇に比べ明るく塗装されていました。吃水線より上の船体および上部構造物は、少し青味がかった明るいブルーに塗られていました。飛行甲板は、進行方向に直角の方向に張られた木製の甲板ですので、①タンがよいでしょう。カタパルトの部分は黒鉄

色、甲板上の白線は、修理などでだんだん消えてしまったようです。甲板の下面は、船体と同色のグレーが塗られていたようです。煙突は、最頂部の部分が黒く塗られていました。カッターや内火艇はキャンバスがかけられていたため、上面はつや消しの白、船体は船体と同色のグレー又は若干濃いグレーが塗られていました。なお、吃水線に

よって黒のラインが船体の全長にわたって入れられていましたが、この線は、よれや改修で比較的不明瞭です。吃水線下の船体は、艦底色と言われる暗い赤で塗られています。エッセックス級の各空母は、大戦後半に三色又は三色の雲型パターンの迷彩色をほどこしていましたが、色は濃いグレー、船体色、うすいグレーの三色と思われます。



《作る前にお読み下さい》

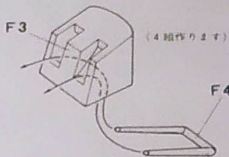
★カンナ(線)から部品を切りはなす場合、必ずニッパーかナイフ等を使って、ていねいに切りはなして下さい。★接着剤は組立てる部品の両方に少しづつ付けて接着して下さい。

※接着剤の塗布方法は必ず接着剤の塗布方法に準じて下さい。接着剤の塗布方法に準じて塗布して下さい。接着剤の塗布方法は必ず接着剤の塗布方法に準じて下さい。接着剤の塗布方法に準じて塗布して下さい。

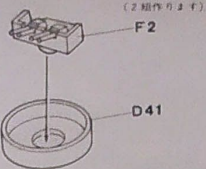
※切り抜いてからプレートを貼ります。

※部品を取出した後は必ず10分程度乾燥させ、完全に乾かしてから組み立てて下さい。

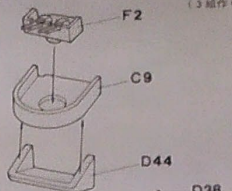
1 高角砲の組立て



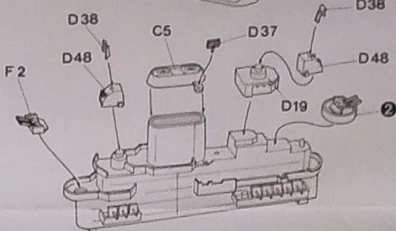
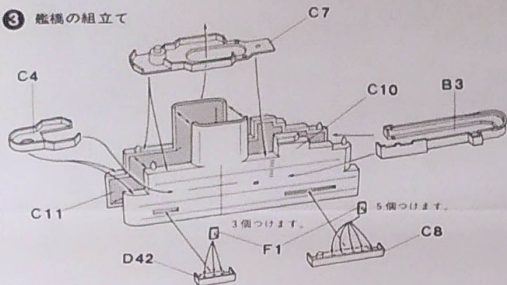
2 4連装機銃の組立て



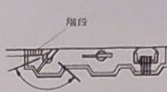
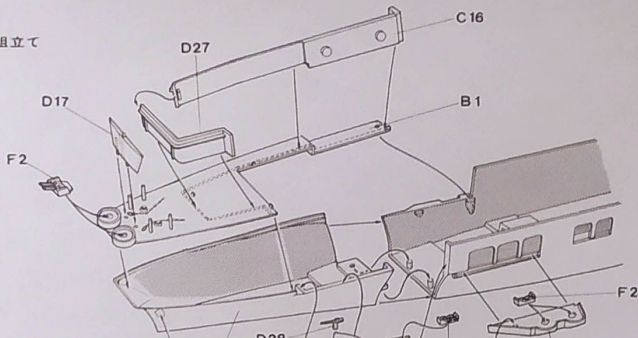
(3組作ります)



3 艦橋の組立て

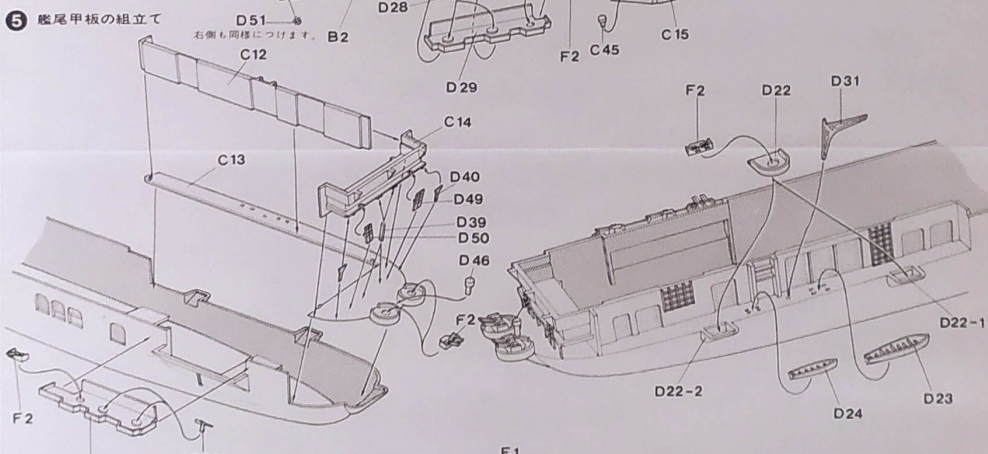


4 艦首甲板の組立て

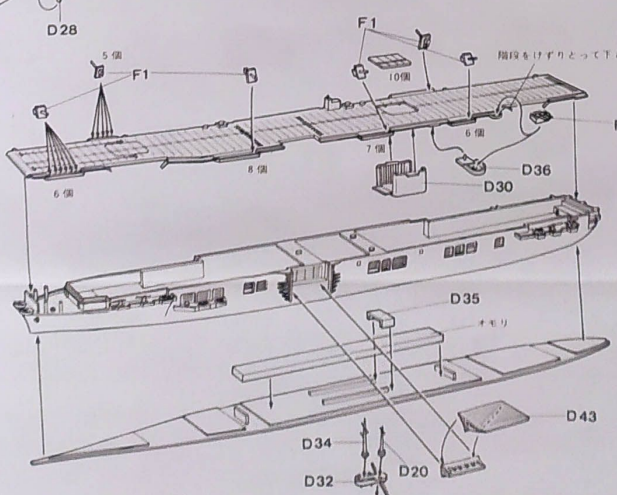


★単装砲を進行方向と平行につけますと階段にあたってしまいますので図の角度で取付けて下さい。

5 艦尾甲板の組立て



6 船体の組立て

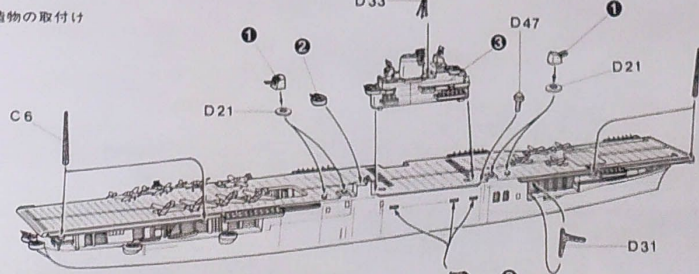


★後部両連装対空機銃はD22-1を前へD22-2を後へつけて下さい。単装機銃は指定の数付けて下さい。



★サイドエレベーターを降ろした状態で作るときは点線の位置で切りはなして下さい。

7 上部構造物の取付け



★アシテナマストC6は艦橋の時は横に、通常航行の時は立っています。どちらが好みの状態で組立てて下さい。